

# 私の知る羽田澄子さん

佐渡 京子

私が羽田さんの演出助手として働いていたのは1999年～2001年までの3年間、作品では、「続・住民の選択した町の福祉」、「平塚らいてうの生涯」の2本に関わった。

子供の頃から映画が好きで、漠然と映画の仕事につきたいと思っていた私は、大学卒業の年にたまたま観た「住民の選択した町の福祉」がきっかけで、どうしても羽田さんと仕事がしたいと思い、羽田さんと同じ学校を卒業したというだけで、強引に演出助手にいただいた。羽田さんは学校の先輩と言っても、私とは50歳以上も歳が離れており、卒業したばかりの私は、助手として仕事をサポートしたというより、迷惑をかけたことのほうが多く、羽田さん、それから羽田さんのご主人でプロデューサーでもある工藤さんには、映画作りのみならず、かけがえのない多くのことを教えていただいたと思っている。

日本の記録映画界の先駆的存在である羽田さんは、伝統芸能や社会福祉など、独自の視点とメッセージで社会を変える作品をたくさん撮ってこられた。しかし今回は、羽田さんの映画監督としての評価や社会的評価は他に譲りたい。なぜなら、私のなかの羽田さんは、「偉大な映画監督」ではなく、どこまでも「かわいらしい人」というイメージなのだから。

## 誰もが和らぐ羽田さんの素顔

羽田さんに会ったことがある人なら、誰もがそう思うと思うが、羽田さんは、いつもにこにこ、ふわふわしていて、誰にも警戒感、緊張を感じさせない。羽田さんがいるだけで、その場の空気が和らぐ。羽田さんの醸し出すその雰囲気は、映画の被写体の中に溶け込み、彼らが気を許して本当の姿をさらけだしたり、彼らの口から直に本音を聞き出すという、記録映画には必要不可欠な材料づくりにとても役立っていると思う。

被写体が羽田さんを信頼し、羽田さんになら見せてもいい、羽田さんになら本当のことを話す、羽田さんの作品になら登場してもいいというケースが何度もあった。

記録映画は劇映画と違い、撮影スタジオやセットのなかで、登場人物に台詞を言わせるのではないから、特に人物が動いたり話したりするシーンの撮影のチャンスはたった一度きり。だからそれを逃したらもうその後はない、という緊張感が常につきまとう。

映画監督としての羽田さんの才能については、多くの人が評価しているが、私は、画面のなかに直に写らない、この羽田さんの魅力こそが、記録映画作家としての天性の才能だと思う。

## 作品には妥協しない作家精神

しかし羽田さんはやわらかいだけかというところではない。羽田さんは、よく「魂を込めて作品をつくる」と言うが、羽田さんのなかには、魂というか、決して譲れない信念というものが、それは何においても優先的に追求される。たとえ時間と労力とお金がかかっても、誰かの機嫌を損ねることであっても、羽田さんは恐れない。

長い時間をかけて編集し、やっと完成間近というときに、仕上がりに違和感を感じてほとんどをやり直したこと、無理を承知でやっとインタビューに漕ぎ付けたが、思うように話が引き出せなくて、もう一度頼み込んだこと、有名な方に出演していただいたものの、編集するうちに構成上必要ないことに気づき、結局採用しなかったことなど、インタビューのアレンジなどのスケジュール管理と資金を調達するプロデューサー泣かせだと工藤さ

んは言うが、しかし誰もが羽田さんの信念なしには映画は成り立たないことを知っている。

周囲でサポートする私たちが困惑しなかったと言えば嘘になるが、自分の気持ちを迷いなく表現したいという強い意志を持ち、信念を貫くためには、あらゆる雑音を一切遮断できてしまう羽田さんの潔さには心打たれるものがあった。

私は幸運なことに演出助手という仕事柄、多くの時間を羽田さんと一緒に過ごすことができた。ロケ先に移動しながら、食事をしながら、休憩時間にお茶を飲みながら羽田さんとお喋りしたことが、なつかしく思い出される。

助手として、監督の考えや思想を知ることは何よりも大切なので、羽田さんをよく知って仕事に生かしたいという気持ちもあった。しかしそれ以上に、私は人間として、女性として、羽田澄子さんという人に強く興味を持っていたと思う。羽田さん、あなたは どうしてこんなにかわいらしくて魅力的なのですか、と。

### 鋭い問題意識と責任感

戦時中の話、旅順での生活の話、戦後引き揚げてきた頃の話、岩波記録映画製作所で仕事をしていた時の話、古きよき時代の映画界の話や逸話など、羽田さんの生き方、考え方をすることは、当時の生きた歴史をまるごと知ることだった。

羽田さんが生きた昭和という時代は、時代そのものがドラマチックだったのだが、羽田さんにはその艱難辛苦の澱のようなものが全く残っておらず、不思議な透明で穏やかな空気が漂っている。本当の意味で人生の荒波を乗り越えて生きてきた人には、どこか超越しているところがあるのかもしれない。

とはいえ困難を乗り越えてきたからこそわかる他人の痛みや苦しみ、それを理解して相手を思いやれること、何かをしなければという強い問題意識と責任感、それこそが羽田さんの美德であり、それが羽田さんの作品にはっきりと映し出されていると思う。

羽田さんと私が卒業した自由学園には、創立者の羽仁もと子先生が多くの言葉を残しているが、そのなかで羽田さんがよく言っていたのは、「感じた人が行う責任がある」という言葉だった。

「感じた人が行う責任がある」というのは、小さな例では、道にゴミが落ちていて、汚いと感じる、汚いと感じたのに素通りするのはいけなくて、そう思った人が自ら拾って捨てるべきということである。

### 心に訴える表現力

映画というものは記録映画に限らず、映画監督の感性で出来ているものだが、まず羽田さんの感性のベースには、「感じた人が行う責任がある」ということがあり、羽田さんの多くの社会福祉を題材にした映画は、お母様を自宅で介護した実体験と社会福祉とは何かという社会への問いかけが源になっているし、最近の作品である終末期医療に問題を投げかけた映画「終わりよければすべてよし」は、羽田さんの実の妹さんが病院で亡くなられたときに感じた違和感がきっかけとなってできた作品だという。

羽田さんの感性に忠実に映像化されたものが、こんなに多くの人々に受け入れられるのは、映画の根底に流れるものが、素直でシンプルな、人間として当たり前の感情であって、扱っているテーマが特殊な分野にあるものであったとしても、核心にある問題提起は誰にもわかりやすいように噛み砕いて表現されているからだと思う。

そして私が一番素晴らしいと思うのは、羽田さんの映画の題材となった社会福祉や医療にしろ、政治にしろ、現実がどんなに暗く悲惨でも、そのテーマは必ず希望的なメッセージとなって人々の心に訴えかけるように表現されているところである。どんな状況におい

でも、希望こそが現状を打開し、前を向いて進むことこそ、何かを変える第一歩であるという考え方は、おそらく厳しい時代を曲がることなくまっすぐに生き抜いた羽田さんの実感であり、それが作品を通じて、観る人に勇気を与えるのだと思う。

### 「感じることを大切に！」

羽田さんからは「感じることを大切にしてください」と教わってきた。私が突然中国行きを決めたのも、WTO 加入や、北京オリンピックの開催が決定して中国が世界から脚光を浴び、経済が活発になっていたからではない。初めて中国に行ったとき、この国は面白い、懐が深い、中国に行けば何かがあると漠然と感じたからであった。それがなんなのかを知りたい一心で私は中国に渡ってきた。正直言ってその何かはまだわからないし、私がこの国で何が出来るかもよくわからないが、今回、羽田さんの方正のロケに通訳としてお手伝いし、方正のことを知り、「方正友好交流の会」の方々と触れ合うチャンスを与えられたことは、少なからず中国に来た意味があるのかなと思っている。

### 志を持続させること

私が折に触れて思い出すのは、羽田さんがいつも仕事の時に私に言っていた、「何をするにも志を持ち続けること」ということである。羽田さんの言う「志」とは、何かをするときに自分の利益だけを考えるのではなく、その行動が少しでも誰かの、世の中のために役に立つことをするということである。

「志」を持ちながら、「感じた人が行う責任がある」というのを真の意味で実行しようとするれば一生をかけて取り組まなければいけない仕事になるはずだが、誰もがそう思って行動すれば、この世の中も少しは変わるんじゃないかと思う。

羽田さんは映画を通して、これまでもこれからも多くの人に影響を与えていくと思うが、私は私のやり方で羽田さんから感じたことを後世に確実に引き継いでいくことが私なりの「感じた人が行う責任」を全うすることだと思っている。

くさわたり・きょうこ、1977 年生まれ。自由学園卒。1999 年～2001 年まで（株）自由工房で羽田澄子監督の助監督として勤務。2001 年中国留学。2003 年～2005 年河北省燕山大学に勤務。2006 年～現在、在中国日本国大使館に委嘱員として勤務>